

お騒がせマリッジ2

K a n a & E i c h i

七福さゆり

Sayuri Shichifuku

ternity



エタニティ文庫

もくじ

お騒がせマリッジ2	5
番外編 宝条瑛知のあるご機嫌な バレンタインデー	281
書き下ろし番外編 お騒がせファミリー	337

お騒がせマリッジ2

戦闘準備 変態社長夫と意地っ張り妻

男なんて、大大大大大ーっ嫌い。

私は恋愛なんて絶対しない！

浮気を繰り返す父、そしてその浮気を嘆きながらも父に依存して、悲劇のヒロインを
 気取り、離婚しようとする母。女癖が悪い兄に、旦那に浮気をされて悩む従妹——
 そんな女癖が悪い男と男運のない女を身内に持つ私、白崎夏奈は、「男なんて最低っ！
 大っ嫌い！ 恋愛なんて絶対しないっ！ 一生一人で生きていく！」と、決めていたの
 だけど……

実家の会社が経営難で潰れそうになったのを機に、私の運命の歯車は狂いだした。

「夏奈さん、実はお願いがあるのですが」

「何？ 先に言っておくけど、変態的なお願いだったら、ぶっ飛ばすからね？」

「違いますよ。実はシューズボックスの仕切りがもう二段ほど欲しいのですが……昼食
 を終えたら、作って頂けませんか？」

「あ、なんだ。うん、わかった。ちょうど同じような色の板が余ってるから、ちゃっちゃ
 と作っちゃうね。あの作りだとブーツとかしまいにくいと思ってたし、ちよつとアレ
 ンジしても構わない？」

「ありがとうございます。ええ、構いませんよ。じゃあ、俺は作業後にちよつど食べら
 れるよう、お菓子を作っておきますね」

「わあいつ！ ありがとうございます！ パンケーキがいいなっ！ 生クリームてんこもりのや
 っ！」

「了解しました」

彼の名は、宝条瑛知——

シャープな印象を与える細いフレームのメガネ、切れ長の瞳、高くスツとした鼻梁、
 形のいい唇、日本人離れた高身長とスタイル……と整いすぎた容姿を持ち、百年以上
 続く製薬会社、宝条グループの次男で、現社長。彼との出会いはとんでもなく奇妙なも
 のだった。私の父が親会社である宝条グループに資金援助を頼んだのだけど……

その代わりにとんでもない条件をふっかけてきたのだ。

それは瑛知さんとの、ある条件での結婚——

父に土下座で頼まれ、家族を見捨てることができなかつた私は、彼と「完全別居の契約結婚」をすることになったのだ。

この男、素晴らしいスペックを持っているにもかかわらず、少々？ いや、かなり変わっていい——

「では、変態的なお願いは後ほど……ということだ」

「変態的な願い事もあんの!? ……トンカチで殴られてもいいなら、聞いてあげてもいいけど?」

「それもまたいいですね。新たな扉が開けるかもしれません」

「聞いてたまるか。一生開けないように、釘で打ち付けるからっ! ひたすら打ち付けるからねっ!」

「釘……なんだか卑猥な響きで……」

「どこがっ!? 少しも卑猥じゃないでしょ!」

——と、このようにそれらを全て台無しにしている残念な変態男だ。

男なんて大嫌いだけど、一切の接触がないのならないか、と思つて結婚したものの、結婚前に前社長である宝条家長男とその妻が失踪したことによつて、条件がガラリと変わってしまった。

前社長が辞職したことにより、次男である瑛知さんが社長に就任。前社長と妻の間に

は子供がいな。そのため跡継ぎが必要。

——つまり、次男の妻である私が跡継ぎを産まないといけなくなつたわけで……

断れる立場になかつた私は、泣く泣く瑛知さんと一緒に暮らすことになつたのだつた。初めはこの男が大嫌い、瑛知さんも私のことを好ましいとは思つていなかったはずだつたのだけど——なぜか好かれるようになって、私も一緒に暮らす上で彼のセクハラ行為……じゃなかつた、優しさに触れ、惹かれて、今では両想いになつて本当の意味で夫婦となつた。

「でも、お菓子なんて作つてて大丈夫? 昨日も仕事で、寝るの遅かつたんでしょ? 今日はずつと休んだし、少しゆっくりして休んだ方がいいんじゃない?」

突如役員から、社長に就任した瑛知さん。

実は彼の夢は、宝条グループの社長になることだつたらしい。

次男だからと早々に諦めて、役員として会社の発展に尽くそうとしていた瑛知さんだつたけれど、お兄さんの失踪で夢を叶えることができた。

高熱を出したときも会社に行こうとし、残業が続いて睡眠不足が続いているときも、家に仕事をもち帰ってきたときも、けして辛そうな顔は見せない。むしろイキイキとしていて楽しそうだ。

瑛知さんを支えたい……

彼を好きになってからは、自然とそう思うようになった。
恋愛をするなんて……男を好きになるなんて、ずっと馬鹿らしいと思っていた。でも、今は違う。

瑛知さんを好きになれて、幸せだ。

「……今日もしてくれているんですね」

「え？」

「ネックレス、です」

瑛知さんはニッコリ微笑み、自分の首元を指先でトントンと叩く。

「あ、……えーっと……まあねっ！ 欲しかったやつ、だし？ 貰ったばかりだし……ねっ！」

これは私の誕生日に、瑛知さんがプレゼントしてくれたネックレスだ。

私が欲しがっていたのを覚えていたらしく、サプライズでプレゼントされたときは、不覚にも泣いてしまった。

……瑛知さんにはあんな言い方をしたけれど、実は私の宝物。

小粒のパールとダイヤモンドがあしらわれた、ピンクゴールドのハートモチーフのネックレス。どんな服装にも合わせやすいからいつもつけている。……コーディネットに合わないときも、実はお守りとして小さなアクセサリーケースに入れて持ち歩いているのだ。

のだ。

これを身に着けていると、なーんか胸の中が温かくなるんだよね……

ふとした瞬間にネックレスに触れると、瑛知さんと結婚して幸せって気持ちを思い出して、自然と口元が綻ぶのだ。

「俺が贈ったネックレスが、夏奈さんの首筋に触れ続ける……なんだか俺自身がいつも夏奈さんの首筋に吸い付いているみたいで、気分がいいですね」

「怖っ！ ていうか気持ち悪いから、そういうこと言うのやめてよっ！ ド変態っ！」
しばらくは、見るたびに呪いのアイテムのように見えてしまいそう……！

「では、俺はお菓子作りに取り掛かりますね」

「うん、私もさっそく作業に入るね」

……ということ、若干、男女の役目が逆な気がするし、普通の夫婦とはどこか違うかもしれないけれど、私たちは幸せな毎日を送っています。

第一戦 除夜の鐘すら敵わない。

新年、あけましておめでとうございます！

本日は、瑛知さんと結婚してから初めてのお正月を迎えました。

「美味しい……っ！」

ダイニングテーブルの上には手作りのお餅もちを使ったお雑煮を始め、瑛知さんが腕によりをかけた豪華なおせち料理が並んでいる。

ああ、なんて素敵なお景っ！ それに見ただけじゃなくて味も最高！

上品な出汁だしが利いたお雑煮は文句なしだし、和洋折衷のおせちは一品一品こだわっていて、お腹いっぱいなのに箸が止まらない。

「相変わらずよく食べて頂けるので、作り甲斐があります。雑煮のおかわりもありますよ」

「おかわり欲しいっ！ お餅、もう一個食べたい！」

おかわりを貰うべく器うつわを空にしようと、残り少ない汁とお餅を口に運ぶ。

「喉に詰まらせないように注意してくださいね。……詰まらせたら問答無用で吸い取りま

すから、覚悟してくださいね」

ちようと呑み込んだお餅が大きめだったから、一瞬ドキッとすする。

「き、気を付けるよ。新年早々、口の中に掃除機突っ込まれて吸引されるとか、絶対やだし……」

「掃除機？ そんな雑菌だらけの不潔なものを夏奈さんの口の中に入れるわけないじゃ

ないですか。俺がキスして、全身全霊を込めて吸い出します」

爽やかな笑顔で某掃除機メーカーにも負けない吸引力を発揮はたらしますと言われ、背筋に

水を落とされたみたいにゾクゾクする。

こ、この変態ならやりかねない！

「ぜ、絶対やだっ！ 雑菌だらけの掃除機に吸い出された方が、数百万倍マシだから！ というか頼むからそっちにして！ 絶対掃除機にしてっ！」

「そう言われると、意地でも口で吸いたくなりますね。……ああ、そうです。いざというときのために、予行練習でもしておきますか？」

「『ああ、そうです』……じゃないからっ！ し・な・いっ！ というか詰まらせないっ！ 練習なんてする必要ナシ！」

慎重に食べ進める私を見ながら、瑛知さんはニヤリと笑う。

「み、見ないでよっ！ 詰まらせないって言ってんでしょっ！」

「俺は、純粹な気持ちで美味しそうに食べている夏奈さんは可愛らしいなあと思っ、見ているだけで……」

「純粹な気持ちを持った人間が、そんな顔で見えてくるかっ！」

ああ、新しい年を迎えても、瑛知さんの性格にはブレがない……

ちよつとはブレてくれたらしいのにといいながら、私はもっちもつちと絶妙な焼き加

減のお餅もちを咀嚼そしゃくする。

二人で迎える初めてのお正月——

結婚した女友達は、年末年始は夫の実家で過すごすと言っていた子が多かったから、てっきり私もそうしなきゃいけないのかなって思っていた。

義実家で過すごす年末年始……粗相そそうのないようにしなくちゃ。ああ、緊張する！ なんとかかなりドキドキしていたのだけど、瑛知さんときたら、初めから全くその気はなかったよう……

『え、年末年始を実家で？ 嫌ですよ。親戚も集まってくるでしょうし、激しく面倒です。挨拶もいりません。……夏奈さん、そんなに俺の実家がいいのですか？ 変わっていますね』

『違う、違う、違ううっ！ 普通結婚したら、お正月は夫の実家へ挨拶しに行ったりするでしょ？』

『ああ、なるほど。そういうことですか』

挨拶ぐらいいはさすがにした方がいいんじゃないかと食い下がったものの、全くその必要はないと言われた。

詳しく聞けば、瑛知さんは以前、『たまには年末年始を一緒に過すごそう。それが駄目なら挨拶くらいしに顔を出しなさい』と両親からお説教を受け、マイペースに過すごさせ

てくれるなら滞在してもいいと、洪々数日間を実家で過すごしたことがあつたらしい。

四日間の滞在を予定していたけれど、一日過ぎたところで『お願いだから帰ってくれ。誘ってすまなかった。これからはお前の好きにきなさい』と言われ、以降は誘われなくなつたそうだ。

一体何したの……!? と尋ねたところ、瑛知さんとはびきり爽さわやかな笑顔で、ただマイペースに過すごしたただけだとしか答えなかった。

ああ、なんて恐ろしいの！ 一体どうマイペースに過すごしたら、そんなセリフを言われることになるわけ!? お義父さん、お義母さん、お疲れ様です……！

それよりも私の実家に挨拶へ行きたいと言われたけれど、今年、うちの家族は年末年始はハワイで過すごすと聞いていたから、いらないと断つた。

まあ、そうでなくても、何か適当な理由をつけて断つたと思う。いつも忙しい瑛知さんと二人きりでのんびり過すごせる機会を無駄にしたくないし、うちの両親も挨拶なんてこだわる人たちじゃないから、瑛知さんに文句を言う心配もないしね。

慎重にお餅を呑み込んでおかわりを要求すると、瑛知さんは背もたれにかけてあったリボンやフリルがたっぷりついた乙女チックなエプロンを身に着け、さっとお椀わんを回収してくれた。

「こ、今年もまたそのエプロンなの？」

「ええ、新年だからって、新調するつもりはありませんよ」

「ああ、そう……まあ、どっちでもいいけど」

「このエプロンはポケットがたくさん付いていて、機能性に優れていますからね。くたびれるまで使うつもりです」

瑛知さんが愛用しているこの乙女チックなフリルエプロンは、会社の飲み会で行われたビンゴ大会でゲットしたものでらしい。捨てるのはエコじゃないから、という理由で使っていると教えてもらったけれど……やっぱり単に気に入っているんじゃないかと思う。

しかもゲットしたのは一枚じゃなくて七枚だったみたいで、一週間毎日違うものを身に着けている。一緒に暮らしているうちに、だんだん法則がわかってしまった。

月曜はピンクのドット柄、火曜は前当てとポケットがハート型のもの、水曜は薔薇柄、木曜は水色のストライプ柄、金曜は赤のチェック柄、土曜はスイーツ柄、日曜は苺柄……と、曜日によって使い分けられているようだった。

「そんな熱い視線で見つめられると、少々照れてしまいますね。どうかしましたか？」
「や、なんでもない」

もし本人にエプロンの法則について確認したら『興味を持って頂けて嬉しいですよ。エプロンだけでなく、俺のことを事細かに教えて差し上げます。さあ、すぐに俺の部屋へ行きましょう』なんて言っていて、とんでもない流れになりそう。ここは自重するに限る。

でも、絶対そう！ だってここしばらくの間、その日の柄をメモしておいたからね！
間違いないよ！

……って、なんか私、怖っ！ ストーカーっぽい！ 傍から見たら、私も充分変な奴
だわ！

「ああ、雑煮の餅は太るから一個にしておこうと思っただけだけど、二個食べたとかでしようか？ いいですよ。二個焼いてきましょう」

「違うよ！ ……っていうか、私すぐ肉付いちゃうタイプだから、一個でも危険なんだけ
ど！」

ただでさえ、正月休みに入ってから食べまくっているしね。正直、ウエストがちよっ
ときついような……

「すぐにカロリーを消費すれば、問題ありません。俺も夏奈さんのカロリー消費をお手
伝いしますよ」

「腹筋を手伝ってくれるのか？」

一人だとやりにくいから、足を押さえてくれたらありがたいかも。

「いえ、もっと楽しくカロリー消費しましょう」

妙に爽やかな笑顔で言われて、嫌な予感で胸がいつぱいになる。

「……えーっと、一応聞くけど……何？」

「それはもちろん、セック……」
「やっぱり言わなくていい！ ド変態！」

聞かなきゃよかったー！
すかさず遮かざって罵ののると、瑛知さんは口元くちぶちを綻はなばせる。

ま、また、嬉うれしそうな顔かほしてるーっ！

いつもそうなのだ。私が罵ると、瑛知さんは怒いらるところか、嬉うれしそうな表情へいしやうを見せる。
へ、変な奴……本当、変な奴……

二杯目のお雑煮ぞうじを頬張ほ張ちっていると、瑛知さんが箸はしを止めてジッとこちらを見ている。
「何ジロジロ見てんの？」

また変なことを考えているんじゃないかと身構みくまえていたら、瑛知さんは頬ほを緩ゆるめて笑わらう。

「いえ、今まで生きてきた中で、今年の正月が一番楽しいなあと思ひまして」

「……っ！」

ふ、不意打ち——……っ！

心臓しんざうが大きく跳ね上がって、箸はしを落としそうになる。頬ほがポポポッと熱あつくなって、思おもわず手で煽あおぎたくなった。

……ちよっと悔くしいけど、好きなんだよね、やっぱり。

「夏奈さんは、今までの正月の中で俺との正月は何番目に楽しいですか？」

「ええ？ 何その質問」

「何番目か知りたいんです」

瑛知さんの表情へいしやうはいつものちよっと変態的なものではなかった。

あれ、もしかして真剣？

「えーっ……」

今までのお正月を思い出してみる。

浮気性の父もさすがに正月ばかりは自重じちゆうし、兄もお目当ての女の子たちが実家に帰かえっているとかなんとか言って、お正月だけはなんだかんだで家族一緒に過すごしていた。

去年は悪酔あくすいいした兄が私の高校時代の制服を着て踊り出したものだから、家族全員、お腹はらがよじれるほど笑わらったんだっけ。

うん、楽しかった。楽しかった……けど……

じゃあ、一昨年……もつと前は？

過まぎっていくと、ちよっと胸むねが痛いたくなる。家族の中でお正月ぐらいいは楽しく過すごしたいという暗黙あんもくの了解りやうかいがあったから、実家で過ますお正月は確かに楽しかった。

……楽しかったけれど、私はどこか冷ひやめていた。

だってあの楽しさは作り物だ。お正月が終わったたら両親はまた不仲ふちゆうに戻り、家の中の

雰囲気は暗くなるってわかってた。

本当は仲が悪いくせに、お正月だからって仲良し家族ごっこ？ 馬鹿みたい。でも、今日みたいな日だったら、お正月だけじゃなくて、毎日続いてほしいなんて思う自分が一番馬鹿みたい。……なんて、口には出さないけれど、いつの間にかそんなことを考えるようになって、純粹に楽しめなくなっていた。

「もしかして、ビリですか？ まあ、それはそれで燃えますね。いつか必ずナンバーワンに君臨してみせますよ」

「えっ！ 違う、違う！」

私としたことが、柄にもなくセンチメンタルな気分になっちゃってたよ。

「楽しいっていうか……なんていうか……」

「楽しくないというか、つまらないですか？」

「ううん、そうじゃなくて……」

瑛知さんと過ごすお正月は、作り物なんかじゃない。

だから今日が終わっても、明日も明後日もずっと、こうしていられる。それはなんて……なんて幸せなことなんだろう。

胸の真ん中が、ポカポカ温かい。

「楽しいっていうか、それ以上っていうか……幸せ、なんだよね。今まで過ごしてきた

お正月の中で、一番幸せ……」

予想外の答えだったのか、瑛知さんの切れ長の目がまん丸くなる。

ひいひい……！ は、恥ずかしい。なんか、すごく恥ずかしくなってきた！

「夏奈さ……」

「そ、それよりもっ！ 午後から初詣に行かないっ!? セっかくだしっ！ お正月だしっ！ ね!?!」

恥ずかしさのあまり瑛知さんの言葉を遮り、ペラペラ話す。

「初詣……いいですね。是非、行きましょう」

「しっかり温かくしていかないとねーっ！」

「そうですね。急に恥ずかしくなってきたら、マシンガントークをすることで誤魔化している可愛い夏奈さんが風邪を引いてしまっは大変ですから」

「……っ……わ、わかっているなら、言わないでよっ！ 知らないふりしてよ！」

瑛知さんはなぜかこのタイミングでスマホを取り出し、操作する。

「何してんの？」

「先ほどのセリフをもう一度言って頂けますか？」

「な、何する気？」

瑛知さんはニコリ笑うと、なぜか私の方にスマホを向ける。

「ちよ、ちよっと、何？ 何してんの？」
 「動画に取めさせて頂こうかと。あ、先ほどのように微笑みながらでお願いします」
 「で、できるかーっ！ ちよっ……カメラこっちに向けてっ！」

顔の前で腕を振って、必死に撮影を妨害した。

「では、せめて音声だけでも頂けますか？ ちょうどボイスレコーダーアプリをダウンロードしたんです」

「音声だけだからっていいわけじゃないでしょっ！ ……って、なんでそんなアプリをダウンロードしてんのっ!？」

「色々使えそうだと思って、つい先日ダウンロードしました」
 すっごくいい笑顔でサラッと言われた。

色々使えそうって何っ!? 仕事で!? ……仕事だよねっ!? そうだと言って！

「ああ、ちなみに仕事では使いませんよ？ 夏奈さんと色々楽しめるかなあと考えて！

思考を読まれたのか、瑛知さんはすかさず付け加えた。

エ、エスパー!? おまわりさんっ！ 変態エスパーがここにいます！

「色々とって何っ！ あ、言わないでっ！ 怖いからっ！」

「そうですか？ 残念です。事細かにご説明したかったのですが……」

こ、怖いいいいいいい！ 一体どんな変態的なことを説明する気だったの!?

「………ということで、準備が整いました。いつでもどうぞ」

「ということ、じゃないしっ！ だから嫌だって言ってるでしょ！ い、言っておきますけどっ！ 私、絶対ボイスレコーダーを使うような変態的なこと、絶対、絶対、絶対——っ対しないからねっ！」

そう宣言すると、瑛知さんが切れ長の瞳を丸くする。

え、あれ？ 何、この表情。

「変態的なこと……夏奈さんは俺が変態的なことに使用するために、ボイスレコーダーをダウンロードしたと思ったのですか？」

「えっ?」

違うの!?

「驚きました。夏奈さんがそんな口に出しては言えないようなことを想像されていたとは……」

瑛知さんが眉を顰^{しそ}め、私をジッと見つめてくる。

「えっ………? あ………っ」

えっ、普通に日々の楽しい思い出を、音声として残しておこう的な意味だったの!?

「常識人の夏奈さんが、まさかそのようなことを想像されているとは………本当に驚きま

した。正直、シヨックです」

う、嘘でしょ!? 瑛知さんがそんな微笑ましいことを考えるなんて、ありえないっ! でも瑛知さんだつて変態だけど、人間だもの。気まぐれを起こして普通のことを考えても、おかしくないか。

……つて、これじゃ変態なのは、私の方じゃない! は、恥ずかしい………っ!

オタオタとうろたえていると、瑛知さんはなぜかクスクス笑い出す。

「まあ、いい意味でのシヨックですけどね」

「……は?」

「大正解ですよ。さすが夏奈さん、俺のことはなんでもわかってくださっているのですね」

「えっ! じゃあ、今の反応はなんだったの!? 明らかに『俺は変態的なことなんて微塵も考えてません』とか言いたげな感じだったじゃないっ!」

「ちよつと常識人っぽくふるまっただけですよ。夏奈さんが得意としている芸人顔負けの反応が見たかったので」

な、何それ………っ!

絶句していると、瑛知さんが今撮ったらしい音声再生させる。

『い、言っておきますけどっ! 私、絶対ボイスレコーダーを使うような変態的なこと、絶対、絶対、絶——っ対しないからねっ!』

「ちよ………っ………再生しないでよっ!」

『い、言っておきますけどっ! 私、絶対ボイスレコーダーを使うような変態的なこと、絶対、絶対、絶——っ対しないからねっ!』

「だから再生すんなって言ってるんでしょ!?! 早く消してよっ! トンカチで殴られたいのっ!?!」

瑛知さんは何度も再生して、満足そうに頷く。

「よく録れています。無料のアプリといえども、なかなかあなどれませんね」

「早く消してよっ! 早く消してよっ!」

そう訴えても瑛知さんは全く構うことなく、何度も再生する。

「さて、この音声は今日から目覚ましに使わせてもらいましょう。思いがけない収穫があつて嬉しいですよ。新年早々縁起がいいですね。今年はいいい年になりそうです」

「め、目覚ましっ!? ちよ………消してっ! 消しなさいよっ!」

「夏奈さんボイスのおかげで、明日から素晴らしい目覚めになりますよ。ああ、でも俺は目覚ましを鳴る前に起きてしまいますから、起きてから聞くことになりましたが」

「それ目覚ましの意味ないでしょ! いいから消してよっ!」

「いくら俺の可愛い夏奈さんのお願いでも、それだけは聞いて差し上げられませんね」

必死に頼んでも、全く消してくれない様子がない。

は、腹立つー……っ！

「可愛い可愛い奥さんが、消してつて頼んでるでしょーがっ！」
席を立てスマホを取り上げようとすると、瑛知さんも立ち上がって手を上げる。百五十九センチの私が百八十センチ以上ある彼に敵うわけがなかった。

「可愛い可愛い俺の奥さん、顔が鬼のようになっていきますよ？」
「誰のせいだと思ってるの！ この変態！」

行儀が悪いけど、椅子の上が上がってやろうかっ！ この変態長身野郎に勝つためには、それしかないっ！

「こんなことをしては、雑煮が冷めてしまいますよ？」

ルームシューズを脱いだところで、瑛知さんがそう言っつて牽制してくる。

くっ……なんて、卑怯な……！ 冷めたらお餅が固くなっちゃうっ！ 温め直したら絶対に食感も味も落ちる！

ワナワナと震えながらルームシューズを履き直し、お雑煮にふたたび箸を付けた。

あとで絶対……絶——っ対、消させる！

そう思っていたけれど、お雑煮のあまりの美味しさに、食べ終わる頃にはすっかり忘れてしまったのだった。



午後——

風邪を引かないようしっかりと厚着をして、車で神社へ向かった。コインパーキングに車を停めて降りると、冷たい風が頬に当たり、ゾクゾクと鳥肌が立つ。

「うふう……っ……今日は特に寒いねっ」

「ええ、本当に。あ、夏奈さん、俺側の手はポケットに入れないでください」
「ええ？ やだよ。寒いもん」

自分のコートのポケットへ手を入れようとすると、出して欲しいと言われた。転んだとき、手を使えないから、顔を打つかもしれないと心配してくれているのだろうか。

心配性だなあ。路面が凍っているわけじゃあるまいし、心配しなくても大丈夫なのに。

「ほら、夏奈さん」

「もーはいはい」

過保護だと思いつつも言う通りにすると、出した手を握られた。

「あっ！」

心臓がドクンと大きく跳ね上がる。

「どうかしました?」

「う、ううん、別になんでもない。あは、あはは」
危ないからじゃなくて、手を繋ぎたかったらしい。さっきまで寒くて仕方がなかったのに、蒸気が出そうなほど、身体が熱くなった。

カイロを入れたボケツトに手を入れるより、瑛知さんと手を繋いだ方が温かい。

そんな乙女チックなことを考えていると、瑛知さんがニヤリと笑って耳打ちしてくる。

「……怪しいですね?」

「な、ど、どこが? 別にいつも通りだしっ」

「夏奈さん、もしかして……」

ギクツとして、顔が引きつる。

き、気付かれたら、からかわれるっ!

何も言えずに顔を引きつらせたままでいると、瑛知さんがにっこりと微笑む。

「俺の股間でも握らされると期待してくださったんですか? 申し訳ありませんが、さすがの俺も人の目があるところでは自重しようと思うのですが……夏奈さんがどうしても、と言うのなら善処します」

乙女チック気分、ぶち壊し……!

「お、思うわけあるかっ! 人を痴女みたいに言わないでよっ!」

変態に痴女扱いされるなんて……。な、なんたる屈辱っ!

「てっきり俺は、夏奈さんの中で新たな扉が開いたのかと思って、期待に胸を膨らませていたのですが……」

「そ、そんなの開くわけないでしょーがっ! 勝手に膨らませて、鳩胸にでもなっとなさよー!」

言い合っているうちに、あつという間に神社に辿り着いた。

「わーっ……すごい混んでるね」

さすが元旦! 境内は参拝客で溢れ、出店まで並んでいる。見ているだけで心が弾む。「風邪やインフルエンザにかからないように、帰ったらうがい手洗いを徹底しなくてはいけませんね」

「ああ、流行ってるもんね。あ、そうだ。手と口を清めなきゃ」

鳥居をくぐり、身を清めるべく手水舎へ向かう。

「あれ、どっちから洗うんだっけ……」

出がけにネットで調べてきたのに、すっかり忘れてしまった。

「左手からですよ。右手にひしゃくを持って、まずは左手を洗います」

「あ、そっか。……ってあれ? 瑛知さんも調べてきたの?」

「いえ、以前調べたことがあるんです」

「へえ、よく覚えてるね。私、出がけに調べてきたけど、すっかり忘れちゃったよ」
今、瑛知さんに教えてもらったのも、明日になったら、絶対忘れてる自信あり！

「記憶するのは得意なんです」

さすが瑛知さん！ 変態だけど、頭いい！ そのうえば料理するときも、一切レシピ見てないな。記憶力がいいって便利！ すっごく羨ましい！

「ですから夏奈さんの喘ぎ声や身体の特徴なども、全てこの頭の中に記憶してま……」

「それは覚えてなくていい！ その心の穢れも、水で洗い流した方がいいんじゃないっ!？」

罵りながら左手を洗って、ひしゃくを持ち替えて右手も洗う。

「……石鹸をつけて、ゴッシゴッシと洗いたくなりますね」

瑛知さんは重度じゃないけれど、潔癖症だ。

不特定多数の人が使ったひしゃくで手を洗ったり、口をゆすいだりするのは、潔癖症の人からすれば辛い行為なのかもしれない。

「あー……っと、ごめん。私に付き合って、無理しなくていいよ？」

「いえ、他人となら絶対に遠慮しますが、夏奈さんとの初の神社デートですから。しっかりとやりたいんです」

キュンとして思わずひしゃくを手から落としたら、瑛知さんがすかさずキャッチして

くれた。

「それに是非とも叶えてもらいたい願ひ事がありますからね。神様の機嫌を損ねないようになければ」

神様の機嫌……!?! 自分しか信じてなさそうな瑛知さんが、神様の機嫌を気にするなんてびっくり！

「どうしました？ 見開いた目から、目玉が落っこちてしまいですよ？」

「いや、落ちないからっ！ 瑛知さんが神様を信じてるなんて意外だと思って、びっくりしたの」

「いえ、信じていませんよ。でも、『絶対いない』とも言えませんからね」
な、なるほど……それはそれで瑛知さんらしいかも。

「神様に、どんな願いを叶えてもらいたいの？」

濡れた手をハンカチで拭い、ちよっとドキドキしながら尋ねる。

百年以上の歴史がある製薬会社の社長で、変態だけど超絶素晴らしいスペックを持ったイケメン！ そんな瑛知さんなら、大抵の願ひは簡単に叶うだろう。そんな人が神様に頼ってまでも叶えたい願ひ事って、一体なんだろう。

「知りたいですか？」

「うん、知りたい！」

もつと料理が上手になりますように！ とか？ いや、でももう上手だしなあ。瑛知さんの夢だった宝条グループの社長になるっていうのももう叶ったわけだし……うーん、全然想像できない。

「そうですか。夏奈さんはそんなに俺の秘密を知りたいのですか。俺の最も秘めたる場所を覗き込みたいと、そう望んでくださっているわけですね？」

「ちよっ……へ、変な言い方しないでよっ！」

周りの人に聞こえたら、私、変態みたいじゃないっ！

「夏奈さんが仰ったことをそのまま繰り返しただけですが？」

こ、こんの野郎っ！ 余計変態に聞こえるでしょーがっ！ ああっ！ 隣にいるおばあちゃんがこっち見てるよっ……！ 会話聞こえた!? ち、違うんです！ 私じゃなくて隣で涼しい顔して手を洗ってる、一見好青年に見えるこの男が変態なんです！

「そ、それよりも、どんな願い事なの？」

「それはまだ、内緒です」

「ここまで恥かせておいて、内緒おっ！」

「ええ、まだ内緒ですよ。さあ、参拝の列に並びましょう」

『まだ』 ってことは、いつかは教えてくれるのだろうか。

いや、ここまで恥ずかしい思いをさせられたのだから、意地でも教えてもらおう。

手を繋ぎ直して、長い長い列に並ぶ。かなり待つことを覚悟したけれど、瑛知さんと話しながら待っていたから、待ち時間も退屈しなかった。

お賽銭は五百円以内までしか入れたことがないけれど、今年は奮発して千円を入れる。すっごい奮発した！ と高揚している私の隣で、瑛知さんは一万円札を出したかと思うと、全く躊躇わずに賽銭箱に入れた。

「ひえ!？」

い、い、い、一万円——!？」

さすが宝条グループの社長！ 一万円は小銭感覚なの!? 福沢諭吉もびっくりだよ！

「夏奈さん、どうしました？」

「や、お、お賽銭箱に一万円入れたから、びっくりしちゃって。毎年そうなの？」

「いえ、毎年は来ていませんが、大体は千円程度ですね」

「ああ、なんだ。そうだったんだ」

……って、千円でも私にとっては奮発価格だよ！

それにしても一万円を入れてまで叶えたい願い事って、一体なんだろう…… ネットで見た参拝の作法を思い出して、二回礼をしたあと、二回手を叩き、一礼して願い事をする。ちよつと乙女チックな願い事かもしれないけど、これからもずっとずーっと、瑛知さんと一緒に居られますように……っつと。

「今年は夏奈さんの新たな扉が開きますように……」
 そう、今年は新たな扉を……って……

「何言ってるの!? あんた!」

「願い事です」

「まあ、まさかそれが是非とも叶えたい願い事……っ!?」

「ええ、その願いを叶えて頂けるなら、金に糸目いとめはつけませんね」

「ば、ば、ば、馬鹿じゃないの——!?」

他の参拝客の視線を思いっきり集めたけれど、ツッコまずにはいられなかった。

ああ……神様……

この男の煩惱ぼんのうは百八つどころじゃないようなので、昨日の除夜の鐘では足りなかったようです……

「ああ、願い事はそれだけではありませんよ? えー……あー……、ああ、そうです。結婚式が成功するようにと祈りましたよ?」

「……今思いついたように言われても、ちーっとも信用できないんだけど?」

「ああ、バレてしまいましたか。ええ、祈ってません。俺は完璧主義なので、結婚式は神頼みしなくとも絶対に成功させます」

少しぐらい嘘を吐き通そうとする努力をせんかい!

「あのさー、ドレスのことなんだけど……何もそこまでこだわることなくない? 着るの、私だよ? モデルさんみたいな人が着るんだったらわかるけどさー……」

初めは籍を入れるだけで終わらすつもりだったのだけど、やっぱり結婚式をしたいという瑛知さんの希望で、私たちは今秋結婚式を行う予定なのだ。

——そこまではいい。結婚式をしたいと言ってくれたのは、ちよつと照れくさいけれど正直嬉しい。……でもこの変態は、こんな平々凡々の私にオーダードレスを作るつもりなのだ。

しかもこだわりのまくった物を作るつもりでいるらしく、瑛知さんが集めてきた大量のドレスカタログや結婚情報誌には、ドン引きするほどびっしりとメモ付きの付箋ふせんが付いている。

「何を言っているんですか夏奈さん。モデルなんかと比べないでください。夏奈さんはモデルよりも美しくて、綺麗で、可憐かれんですよ」

「……メガネ、曇くもってんじゃない? 拭いた方がいいよ」

恋というフィルターがあるせいかな、この男にはこんな平々凡々の私がどれくらい物体に見えているようだ。

恋ってすごい……



参拝を終えた私たちは、出店を回っていた。

「瑛知さん、無理しなくていいよ?」

潔癖症の瑛知さんには、出店の食べ物はキツイだろうと思っていたのだけど、彼は拒否する様子も見せず、私とたこ焼きをシェアし、今はジャンボフランクソーセージを食べている。私はケチャップ&マスタードで、瑛知さんはシンプルに塩コショウだ。

「いえ、別に無理していません。俺も夏奈さんと同じことがしたいので」

「そう? それならいいけど……」

瑛知さんが一生懸命私に合わせてくれようとしているのがわかって、嬉しい。

今までお祭りや初詣のときに何度も出店で食べ物を買ってきたけれど、今年食べているものが今までで一番美味しく感じる。

「塩コショウ、美味しい?」

「ええ、食べてみますか?」

「いいの? ありがとう。私のも食べる?」

「頂きます。巷で見かけるような人目を気にしない馬鹿なカップルのように、食べさせ

て頂けますか?」

馬鹿なカップルって……

「や、やだよ。恥ずかしいし!」

と言いながらも、持ち手が短くて持ちづらかったので、仕方なくバカップルっぽく食べ合う。すると瑛知さんがニヤリと笑った。

「なんだか、嫌な予感がするんですけど……」

「うん! 塩コショウも美味しいね。ありがとう」

「そうですか。よかったです。夏奈さんが食べさせてくださったケチャップも美味しかったですよ」

「そ、そう……。で、何笑ってるの? なんか楽しいことでもあった? それともやけちゃうほど美味しかった?」

嫌な予感しかなかったけど、一応聞いてみた。

「ええ、夏奈さんが長い棒状のものを食べていると、卑猥な妄想ができてとても楽しいなあと思ひまして」

聞かなきゃよかったー……!

「夏奈さんから長い棒状のものを食べさせて頂く……というのも、またなんだか新たな扉が開けそうですね」

「あ、あ、あんたの頭の中は、一体煩惱ぼんごうがいくつあるわけっ!？」
 「どうでしょう。見当もつきません」

瑛知さんはニツコリと微笑み、少々誇ほこらしげに答えた。

「もう一回手水舎てみづぐらで手を……いや、全身洗せんってきてくれる?」

「そんなもので、俺の穢けがれが落ちると思おもいますか?」

お、思おもわない……! 頑固がんこなカビ汚れけがれよりもしつこそう!

味あじわいたかったからゆっくり食たべていたけど、わざとムツシャムツシャとあつという間に食たべ終おえてやる。

ピンク色な妄想から、真まっ赤な想像さうぞうをして戦慄せんりつしろ!

「……なるほど、歯でガブガブ噛かまれるのも、また……」

瑛知さんは自分の顎あごに手を当てて、感心かんしんしたようにうんうん頷うなづく。

なるほどじゃないしっ! この男は私の想像さうぞうをどこまで斜かめ上に突き抜ぬけていけば気が済よむの!?

「あ、夏奈さん。あちらにチョコバナナがあります。それからりんご飴あめも買かいましょう」

「ちよっ……棒ぼうが付ついているものはっかり選えんでない!? というか確た実に選えんでるで

しよっ!」
 瑛知さんは少しも恥はずかしがる様子を見せず、とても爽さわやかな笑顔で「もちろんじゃ

ないですか」と答こえてチョコバナナを買かいに行いった。

「さあ、どうぞ」

「……いつ、いらない」

本ほん当とうは食たべたいけど、卑ひ猥わいな妄想まうそうをされてはかなわない。

「俺は食たべたくありませんし、このままだとゴミ箱ごみば行ききですな」

「えっ! 何も捨すてなくても……」

「ああ、もつたいない。夏奈さんに食たべて頂いただきこうとした俺の気持ち、バナナの生産者せいさんや日本にっぽんに来きるまでに携たずねわった業者ぎやう者の苦くる勞らう、そしてチョコバナナを作つくった方の思おもいは、全ぜんてこのバナナと共にゴミ箱ごみばへ捨すてられてしままうわけで……」

な、なんて卑ひ怯じやうな……!

「わ、わかっただよ! 食たべるっ! 食たべればいいんでしよっ!?! ドウモアリガトウゴ

ザイマスー! 私わたしバナナ、大好きですからっ!」

「バナナ、大好き。……最高の言葉ことばですな」

「ななっ……なんでもかんでも下くだネタねたに持もっていくのやめてよねーっ!」

「さあ、どうぞ。いやらしくどうぞ」

「こ、こっち見みないでよっ! 馬鹿ばかっ!」

ああ、いまだかつてチョコバナナを食たべるときに、いやらしい食たべ方かたにならないよう

にしないと、なんて注意したことがあっただろうか……。いや、絶対ない！

「ねねねね！ 見て見てっ！ あの人大よ！ さつきチョコバナナ買ってたイケメン！」
 「わ、ホントだ！ ぶっちゃけ、そんなに騒いで大げさーって思ってたけど、ホントにイケメンじゃん！ 女の方が持つてるっことは、彼女に買ってあげたんだけ？ やっさしー！」

「うちのダアなんて、絶対そんなことしてくれないよおっ！ あーあ、羨ましいっ」
 若い女の子たちが、瑛知さんを見てキヤアキヤア騒いでいる。黙っていれば完璧なイケメンだもんね。……中身はただの変態だけだ。

瑛知さんは騒がれているのに気付いているのか、興味が無いのか、ひたすら私がチョコバナナを食べている姿を見ている。

「み、見ないれって言うてるでふおっ!」

「ああ、そうだ。スマホで写真を……いや、動画で撮……」

「らんでいい！ 撮ったら張っ倒すからねっ！」

優しくない！ 優しくない！ これは変態ブレイを強要されてるんだからーっ！

とは言えず、ムッシュムッシュとチョコバナナを平らげる。瑛知さんはチョコバナナだけじゃ満足せず、棒状のものを次々と買ってくるものだから私はひたすら食べ続けることになったのだった。



初詣で、たんのう堪能した私たちは、コインパーキングに停めた車に向かっていた。

ん……………?

ねちっこい視線を感じて横を向くと、瑛知さんがなぜか私をジイッと見つめている。

「何？ もしかして口にチョコ付いてる？」

気を付けて食べてたつもりだったけれど、付いちちゃってるかも。

「いえ、付いていませんよ。付いていたとしたら、俺がそのチャンス逃すと思いますか？ 絶対に逃しませんよ。すかさず舐めとります」

「き、気持ち悪いこと言わないでよっ！ ……じゃ、じゃあ、何？ 何見てんの？」

服に何か付いているのか？ ストッキングが伝線してるとか？

「ご、誤差？ え？ 何？」

「ウェストプラス二センチ。太腿なまことふくらはぎもわずかですが太くなりましたね」

「えっ……………！」

た、体形を見てたの!?

思わずどこかに身を隠したくなかったけれど、瑛知さんは繋いだ手を離してくれない。「間違ひありません。夏奈さん、正月休み前に比べて少々ふつくらしたようですね」

「や、やっぱり？ 自分でもちよつと食べ過ぎだなーとか、実はウエストがきついなー……とか思ってたんだけど……はため傍目から見てもそう思う？」

見た目に出てるって、私……相当やばいんじゃないか、実はウエストがきついチですね」

「ちよ、ちよつと！ 観察しないでよっ！」

「あ、良かったですね。バストはプラス三センチですよ。……と言っても、こっちは正月休み以前に大きくなったようですが」

確かに正月休み前、新しいブラを買いに行つたときに測ってもらつたら、プラス三センチだった。

えっ……てっきりでたらめな数字を言っているんだと思つたけど、実は正確！

へ、変態の目、恐るべし……！

「まあ、こちらは太つたからじゃなくて、俺が丹精込めて育てたからだと思ひますけど」
「た、丹精込めてって、変な言い方しないでよっ！」

「よく育ててくれているようで嬉しいですよ」

瑛知さんはニヤリと笑い、私の胸をまじまじと眺め出す。コートを着ているのに、変態の目には透けて見えているように感じてしまう。

「見ないでよっ！ 馬鹿！ ド変態っ！ 無限大の煩惱の塊っ！」

「これからも手塩にかけて、無限大の煩惱を肥料にして育てて差し上げますから、楽しみにしててくださいね」

「このド変態！ どこに話しかけてんのっ！ 手塩にかけなくていいからっ！ 肥料もいらないからっ！」

車の中は温かくて、ホツとため息がこぼれた。いつの間にかエンジンスターターで暖房を付けていてくれたらしい。

「あー温かあ……んんっ!?」

「どうかしましたか？」

スマホがぶるぶる震えたのに気付いて確かめると、妹の結奈からメールを受信したところだった。

『お姉ちゃんあけましておめでと。今年もよろしくねっ！ 今年はお姉ちゃんとお正月を過ごせなくて寂しいよお〜！ ハワイの海、すっごく綺麗だよ！ 今度はお姉ちゃんとお義兄さんも一緒に行こうねっ！ そういえば二人は新婚旅行へは行かないの？』

メールと共に画像が添付されていて、そこにはエメラルドグリーン色をした綺麗なハワイの海が写っていた。

そういうえば新婚旅行なんて、全然頭になかったなあ……

結婚当時は瑛知さんのことが大っ嫌いだったし、瑛知さんと両想いになったことがわかってからは、結婚式の準備に夢中だったし。

行きたいかと聞かれれば行きたいって答えるけれど、瑛知さんは社長業を継いだばかりでただでさえ忙しいから、今はきつと無理だ。

でも、いつかは行けたらいいなと思いながら画像を全画面表示にして、瑛知さんの方へ向ける。

「結奈からのメールだったよ。ほら、ハワイの海」

「ハワイに行っているんですか？」

あ、そういうえば『挨拶はいらない』としか言わなかったから、旅行に行ってるの知らなかったんだっけ。

「そう、家族全員でね。今年はハワイで年末年始を過ごしてるんだよ」

「旅行……ああ、だから挨拶はいらないって言っていたんですね。その画像、よく見せて頂けますか？」

「うん、いいよ。はい」

もしかして瑛知さん、海が好きなのかな？

やたらと真剣な顔をしているけど、どうしたんだろう。

「この辺り……いえ、こちらの方がいいでしょうか」

「え、何？　こちらって？」

「いえ、今脳内で夏奈さんの水着姿を合成中して……」

瑛知さんは顎に手を当て、ふむふむと頷く。

水着!?　合成!?

「ふむ、美しいですね。ワンピース型……いや、やはりビキニ……裸……。ふむ、素晴らしい……」

「いや、いやいやいやいや！　全部通しておかしいけど、最後が特におかしいですよ！　水着！　水着を着せてよ！　こんな綺麗な海の前になんか裸でいたらただの変質者じゃない！」

全く、この男はどこまで突き進めば気が済むんだか……

「夏奈さん、お願いがあります」

「断る。絶対に嫌っ！」

「……まだ、何も言っていないのですが」

「聞かなくてもわかるしっ！　どうせ変態的なお願いでしょ？　絶対嫌っ！」

シートベルトを締めながら極力瑛知さんから距離を取り、威嚇いかくするようにじとりと睨にらむ。

「期待を裏切って申し訳ございませんが、今日だけは違いますよ。俺のお願い事は、近中に新婚旅行へ行きますよ。……ということでした」

「えっ!? し、新婚旅行っ!？」

「俺としたことが結婚式の準備に気を取られて、新婚旅行を忘れていたとは……。一生の不覚です。画像を見せてもらってよかったです。見せてもらっていなかったら、気付けないままでした」

瑛知さんも私と同じタイミングで思い出したらしい。

夫婦って長く一緒にいると似てくるっていうけど、私たちも少し似てきたのかな。……って、いや、似ちゃダメだ! 私までド変態になっちゃうっ!

「近日中じゃないとダメなの? 私はもう少し先でもいいかなって思うんだけど……」
「ダメです。早く行かないと『新婚』じゃなくなりますから、新婚旅行じゃなくて、夫婦旅行になってしまわないですか」

「ああ、確かに……って、そここだわるんだ?」

「もちろんです。夏奈さんと過ごすイベントは、一つも取りこぼしたくありませんから」
瑛知さん、なんか可愛い……。それに比べて私は……

『近日中じゃないとダメなの? 私はもう少し先でもいいかなって思うんだけど……』

……って、可愛くないな! なんか仕事に疲れて、日曜日も家でゴロゴロしてるおっさんみたいっ! 好きな人が旅行に行こうって言ってくれてるんだから、もっとう、可愛い反応っていうものがあるでしょ!?

ああ、なげなしの女子力がさらに下がってきている気がする。

「夏奈さんは、どこへ行きたいですか?」

「うーん……せつかくの新婚旅行だし、海外に行きたいなーって思う反面、ちよっと昭和チックに、国内で温泉旅行っていうのも憧れるんだよね。近日中なら、瑛知さんは長期休暇を取るの難しだろうし……そういう面を考えると、やっぱり後者かな」

「なるほど、温泉ですか」

でも潔癖症の人にとって、温泉ってどうなんだろう?

不特定多数の人が入っている一つのお風呂を目的に旅行に行くのって、気が進まないんじゃないかな。ちよっと残念だけど、瑛知さんが無理しなくちゃいけないところは行きたくない。せつかくなら二人とも楽しめる場所じゃなくちゃ!

「あ、でも無理に温泉じゃなくても……」

「いいですね。確かに長期は難しいですし、温泉に行きましょう」

えっ! いいの!?

「楽しみですね。どちらの温泉に行きましようか」

意外なほどに乗り気で、拍子抜けする。

「自分で言っておいてなんだけど、大丈夫？ 温泉だよ？ いろんな人が入ったお風呂に入るんだよ？ 瑛知さんが完璧に磨き上げた自宅の浴槽じゃないんだよ？」

「ええ、少々抵抗があるのは事実ですが、それを上回る魅力がありますから問題ありません」

「魅力？」

温泉の効能？ 旅館の雰囲気？

「はい、夏奈さんの浴衣姿です」

瑛知さんは、すかさずそう答える。しかも、大真面目な顔で。

「……は？」

聞き間違いかと思ったけれど、瑛知さんは頼んでもいないのにもう一度『夏奈さんの

浴衣姿が見たいから、温泉がいい』と言った。

「夏奈さんの可愛い浴衣姿、楽しみですね。ああ、そうだ。これを機にカメラを最新型に買い替えましょう。最近のスマホの画質はあなどれませんが、やはりカメラが一番で……」

「や、やめてっ！ お願いだから本当にやめてっ！ ハードル上げないでっ！」

超絶可愛い子ならまだしも、平々凡々の私が浴衣を着たところでなんてことない。温泉の効能を借りても無駄だ。

前々から思ってたけど、瑛知さん、両想いになってから視力悪くなってない!?

「……瑛知さん、メガネの度数絶対合っていないと思うよ？ 早く調整しに行った方がいいんじゃない？」

「いえ、最近合わせてきましたから、バッチリですよ」

バ、バッチリなんだ……

「今日は旅行代理店を回って、パンフレットを集めて帰りましようか」

「お正月なのにやってるのかな？」

「ええ、おそらくは。最悪やっていなくても、店の外には自由に取れるパンフレット置き場があるはずなので」

「あ、そっか」

瑛知さんはカーナビで旅行代理店を検索し、車を走らせる。運転する姿を見ると、頬がポワポワ熱くなってきた。

改めて見ると、瑛知さんって本当にカッコいい……

変なの。こんなカッコいい人が、平々凡々な私を可愛いと思うなんて……

整った横顔、ハンドルを握るゴツゴツした男性らしい手、アクセルを踏む長い足――

それにしても、まさか男嫌いの私が結婚……。しかもこんなイケメンと結婚することになるなんて、夢にも思わなかったなあ。

昔の私が今の私を見たら、卒倒するに違いない。

「温泉、楽しみですね」

「うん、楽しみだね」

「浴衣ブレイ、楽しみですね」

「うん、楽し……んあっ!？」

そ、それに、まさかこんなイケメンが変態だなんて……。別の意味でも、卒倒するに違いない。



旅行代理店を回ってパンフレットを集め終わったあと、せっかくだからドライブデートをしようということになり、瑛知さんは車内から夜景が見られる場所に連れてきてくれた。

「わわわわ、綺麗……!」

海の近くの高台にある、なんの変哲もない駐車場。だけど、そこからは夜の海と夜景

と星空が一望できた。寒くて空気が澄んでいるからか、いつもより星が綺麗に見える。

「気に入って頂けてよかったです」

感動する私を見て、瑛知さんは満足そうに微笑む。

「よくこんな所、知ってたね……。……あっ!」

そうだよ。私と違って、瑛知さんは過去に何人も付き合った人がいるわけだし、こういう女性が喜びそうなロマンチックな場所を知っていてもおかしくないよね。

「や、やっぱり、なんでもない」

ちよつとだけ面白くなくて、胸の中がムカムカする。自分の心の狭さに呆れていると、瑛知さんはクスクス笑い出し、嬉しそうにしている。

「もしかして、俺が以前付き合っていた女性と来た場所に連れてきたと思っっていますか?」

な、なんでわかるの……っ!? エスパ!?

「や、別に私は……」

誤魔化したところで、瑛知さんには全てお見通しだ。バレてしまったのなら、仕方がない。気になるし、聞いてしまおう。

「……うん、思った。そうなの?」

「違いますよ。そもそもデートなんて面倒で、ほとんどしたことがありませんから。こ

の場所は秘書の田端くんから教えて頂いたんです。穴場らしいですよ」

「あ、そうだったんだ」

デートは面倒なのに、私とはしてくれるんだ……

「田端くんは女性の趣味は少々特殊なのですが、こういった女性の喜びそうな場所や店をよく知っているので感心させられます」

「と、特殊って……」

瑛知さんも人のこと言えないと思うけど？

ああ、胸の中が温かくなって、口元が緩むのを抑えられない。顔を見られたくなくて
プイツと横を向く。

「夏奈さん」

名前を呼ばれて、そおっと元の位置に顔を戻すと、長い指先で頬をプニツと突かれた。

ああ、このやり取り……完全にバカップルだよ。でも、嬉しい……

「さっきのは、嫉妬してくださったと思っただけですか？」

「う……。そ、それは……」

「それは……なんですか？」

誤魔化したって、瑛知さんの前では無駄だ。

「し、してるかしてないかで言ったら……どっちかかって言う……し、した？　かも、

しれない……けど……。で、でもっ……それは、人間として自然な感情、っていうか……
その……」

は、は、恥ずかしい——っ……！

真冬だっていうのに、窓を開けたくなるほど顔が熱くて堪らない。

「そうですね。夏奈さんが嫉妬を……。そうですね、嫉妬を……なるほど」

「な、何回も言わないでよっ！　……んっ」

いつの間にかシートベルトを外していた瑛知さんが、助手席に座っている私に覆いかぶさり、唇を奪ってきた。

「ん……っ……んん……」

柔らかい唇を押し付けられて、気持ちよさのあまり産毛が逆立っていく。

自然と緩んだ唇の間から瑛知さんの長い舌が入り込んできて、それを待ち望んでいた私の舌と絡んだ。

「ん……っ……んんっ……は……んん……」

エンジンを消した静かな車内に、舌で唾液を掻き混ぜるいやらしい音と荒い息の音、そして私が時折漏らしてしまう恥ずかしい声が響いた。

コートのボタンを外され、ドキツとする。

え、え、ま、まさか……

ニットカットソーの中に大きな手が潜り込んでくるのがわかって、慌てて瑛知さんの手を挿んだ。

「あっ……え、瑛知……さん？　ちよつと、待って……こ、ここ……車の中……」

「ええ、そうですね」

手がどんなに潜り込んできて、ブラのアンダーに指先が当たる。

「そうですね、じやないでしょ……っ！　車の中は……ダメ……だって……ば……っ！」
瑛知さんは濡れた唇が艶やかに光っている。
反射して、濡れた唇が艶やかに光っている。

ああ、なんだか妙に色っぽい。ドキドキして、心臓が苦しい……

直視できなくて目を逸らすと、大きな手がブラの上から私の胸を包み込む。

「やっぱり大きくなりましたね？」

「う、うるさ……っ……あ……」

カットソーが瑛知さんの手の形に盛り上がっているのに気付いて、顔が燃え上がりそうなほど熱くなる。

「あっ……ちよ、ちよつと、こら……っ……あっ……」

ムニユムニユ揉まれるたび、心臓の音が速くなっていく。

「も……っ……瑛知さん……っ！　ダメだつてば……ひゃっ……」

長い指先がブラのカップの中に入り込んできて、突り始めていた胸の先端をツンと突いた。

「もう乳首を起たせている感じやすい夏奈さん、どうしてダメなんですか？」

「い、言わないですよ！　馬鹿……っ！　……場所的にアウトでしょっ!？」

穴場というだけあって周りに人はいないみたいだけど、外なんだからいつ人が来てもおかしくない。このまま身を委ねたくなる気持ちをと堪え、押し掛かってくる瑛知さんの身体をググツと押し返す。

くううー……！　ビクともしない！

「アウトだからこそ、楽しいんじゃないですか。スリルがあつて、いつも以上に興奮しますね」

「へ、変態基準で考えないですよ……常識人からしたら、全く楽しくない……あっ……こ、こら……っ……あっ……っ……うっ……っ……」

「そうですね？　常識人であるらしい夏奈さんの乳首は、こーんなに楽しんでくださっているようですが、気のせいでしょうか？」

指の腹で胸の先端をクリクリと転がされ、ますます尖ってしまふ。

「こ、れ……は、あなたが弄った……からっ……っ……う……だ、だめっ……だつてば……っ……」

「転がすのが駄目なら、舐めるのはどうですか？」
 「も、もっとダメに決まって……っ……るでしょお……っ!?」
 お腹の奥が甘く疼きだして、膝と膝を擦り合わせると下着の中が潤んでいるのに気付いた。

「こ、ら……っ……も……ホントに……ダメだったら……っ！」

ま、まずい、まずい、まずい——……っ！

濡れていることがバレたら、変態心にますます火をつけてしまうこと間違いない。ジタバタしても瑛知さんはちっとも身体を退けてくれないし、締めたままだったシートベルトに拘束されて全く逃げられそうにない。

「屋台であんな卑猥な棒状のものばかり食べて、俺を誘った夏奈さんがいけないですよ？ 身体で責任を取ってください！」

「ひ、人聞きの悪いこと言わないでよねっ！ 確かにジャ、ジャンボフランクフルトは私が食べたいって言ったけど、その他は瑛知さんが無理矢理食べさせたんでしょっ！」

「ジャンボフランクフルトなんて卑猥な言葉を夏奈さんから聞けるなんて……やはり誘っているじゃないですか。もう完全に止まりません！」

「ど、どこが卑猥な言葉かっ！ この変態っ！ ……あっ！ ちょ、ちょっと、そ、そっちは本当にダメ……ッ！」

胸の先端を弄り回している手はそのまま、空いている方の手がスカートの中に潜り込んできた。付け根に向かってくるのがわかって、膝にギョツと力を入れて瑛知さんの手を挟み込み、それ以上進めないよう阻止する。けれど、乳首を摘ままれ、たちまち力が抜けてしまう。

「ふ、あ……っ……っ……」

防衛も空しく、瑛知さんの手が恥ずかしい場所へ到達した。ストッキング越しに割れ目を擦られると、くちゆくちゅという音が聞こえてくる。

「あ……」

濡れているとは思っていたけれど、音が立つほど濡れているとは思わなかった。は、恥ずかしい——……っ！

「棒状の物ばかり食べさせる変態に感じて、下着とストッキングを通り越すほど濡らしちゃってしまっているのは、どなたでしょう？」

「そ、それは……瑛知さんが……ダメだって言ってるのに、しつこく触る……から……で……ひゃう……っ！」

瑛知さんの指が、ストッキング越しに敏感な粒を爪でカリカリと引っ掻く。

「夏奈さんのお気に入りの場所……ストッキングと下着越しでも膨れてるのがわかりますね？ たくさん触って欲しいとおねだりされているみたいですよ！」

「そ、そんなおねだりしてな……っ……そ、そこ……触ら……ないでっ……ン……っ……あっ……んんう……」

抗議しようとして口を開けば、喘ぎ交じりの声が出てしまう。袖を噛んでも、触れられるたびに鼻にかかった恥ずかしい声が漏れる。

「夏奈さんがこんなにこを主張させるから、指が引つかかっただけですよ？」

「そ、そもそも触らなければ、引つかかることもないでしょ……っ！……は、ん……っ……」

もどかしい刺激が伝わってくるたびに腰が揺れて、ヌルヌルしたものがどんどん溢れてきてしまう。

いくらダメだつて言つても、瑛知さんは触るのをやめてくれない。気持ちよさのあまり、滲んだ涙が瞼に溜まる。

「も、う……瑛知さんっ……！」

じつとり睨むと、嬉しそうに微笑まれた。

「夏奈さんの上目遣い、堪りませぬね」

「上目遣いじゃないっ！ 睨んでるんだつてのっ……！」

身体が火をつけられたみたいにあつくて、いつも瑛知さんを受け入れる場所がヒクヒク疼いて止まらない。

「今日はたくさん食べましたからね。ここで夏奈さんには、予定通りたつぷりカロリーを消費してもらいましょうか」

「そんなのでカロリー消費するぐらいなら、太った方がマシだし……っ！」

こんな所じゃまずいとわかつているのに、直接触って欲しくなってしまう。

ああ、これじゃ私も変態の仲間入りじゃない……っ……！

「……直接触りますよ。いいですか？」

瑛知さんは私の耳を噛みながら、濡れた声で囁いてくる。

「は……っ……ン……だ、だめ……もう、……これ以上……されたら……」

「止まらなくなりますか？」

かなり不覚だったけれど、小さく頷いた。

だつてもうすでに、戻れないくらい身体が火照ってる。これ以上触られたら、最後までしてもらわないと我慢できない。

「そうですね。それは大変ですね」

「えっ」

ニッコリと爽やかな顔で笑われ、嫌な予感がした次の瞬間、瑛知さんの手がショーツの中に入ってきた。

「あっ……ちよ、ちよっ……っ……ひゃっ……あっ……あぁっ……ン……瑛知……」

さっ……ん……馬鹿ああ……っ！

答えた意味、ないじゃない——……っ！

割れ目の中に潜り込んだ指が、ヌルヌルに濡れた敏感な粒を撫で転がす。

「ヌルヌルで、ツルツルで、愛でたくなります。よしよし」

「め、愛でないでっ……あっ……はうっ……ん……っ！」

「撫でると素直に悦ぶところが、ますます愛しくなりますね。よしよし」

「こ、こらああっ……っ！」

指が動くたびに甘い電流が流れ、感電したみたいに身体が跳ね上がる。

「ひう……っ……あっ……ああ……っ……は、うっ……っ」

「あまり声を出すと、誰かが近寄ってきたときに聞こえてしまうかもしれないですね？」

意地悪なことを囁かれ、顔がカアツと熱くなる。

「……っ……っ！　だ、だからここじやイヤだって言ったじゃない……っ……っ……！　馬

鹿っ！　変態っ！　ド変態……あ……っ……っ！」

疼いていた中に指を入れられ、全身の産毛がブワリと逆立つ。

「——……っふ、ああん……っ」

「ド変態の俺に指を入れられて、常識人の夏奈さんの中は、すごく悦んで頂けているみたいですね？　ギユウギユウ締め付けてきますよ？」

「い、言わないで……馬鹿……っ……」

弱い場所を押し潰され、ヌルヌルの液体がどんどん溢れてくる。

こんなところでもないところを誰かに見られたら、通報ものだよっ……！

擦り切れそうになっている理性が警報を鳴らしているけれど、瑛知さんに触れてもらいやすいようにと、足が自然と開いてしまう。

ああ、変態菌に侵されて、私までド変態になっちゃってる……！

「俺が触りやすいように自ら広げてくださっただんですか？　ありがとうございます」

「ち、が……っ……ふあ……」

親指で敏感な粒をくりくりと転がされる。中と外側を一度に弄られると、頭が真っ白になりそうだ。

瑛知さんの長い指でも届かない場所がムズムズ疼いて、喘ぎと一緒に切ないため息が

こぼれた。

「夏奈さんの中、物欲しそうに動いてますね？」

「……そ、そういうこと、言わないで……っ……馬鹿……っ」

刺激にふるふる震えながら抗議したら、埋められていた指を引き抜かれる。

「ん……っ……きゃ……っ……っ！？」

突然の喪失感に身悶えしていると、背もたれを倒され、私はシートベルトをしたまま、